

# オウムと牛が教えてくれた、マヌカの秘密

—マヌカの物語：神話を歴史から切り離す—

## 前書き

北の空から冬将軍がやってくる前に、本稿でマヌカはちみつの歴史を簡単にご紹介いたします。これをお読みになれば、このはちみつにまつわる幻想や神話を一掃できるでしょう。

マオリはポリネシア人で、ニュージーランド（以後 NZ の表記を使用）が英国の植民地となるおよそ 600 年前にこの地域に住み着きました。マオリの人々は数百年にわたり、マヌカはちみつを天然の薬として利用してきました。ところが「何千年もの間」マオリの人々がマヌカを利用していたと説明されることがあります。

そもそも、マヌカが先住民により「何千年もの間利用されてきた」という部分が問題です。NZ は、マオリの人々がやってくる 1200 年代終盤頃までは、全く無人の地でした。つまり NZ に人類が住み始めて、まだ 1000 年足らずです。したがって、「何千年もの間」というのは明らかな誤りです。

はちみつについて言えば、1839 年、宣教師のメアリー・ブランビー（Mary Brumby）が、セ



マオリマラエ（集会所）、ワイタンギ国立保護区、ノースランド地方（Shaun Jeffers—Shutterstock）

イヨウミツバチを英国からオーストラリア経由で NZ に持ち込むまでは、NZ ではちみつは作られていませんでした。

NZ にはおよそ 28 種の在来種のハチがいますが、その中にはセイヨウミツバチのように、コロニーを形成して社会生活を営むように進化した種はひとつもありません。このような在来種のハチは単独制昆虫です。集団で生活することもなければ、蜜を次々に貯蔵してゆく巣房も作りません。巣は地中に作り、幼虫を養うのに必要な分量の蜜しか作りません。

（ブランビー宣教師が新天地で養蜂をはじめたのは、はちみつを作りたいという思いと、教会の礼拝で使うろうそくの原料となるミツロウを確保したいという思いからのようです）。

このようなあまり夢があるとはいえない事実は、マオリの人々がマヌカをよく利用していたことを否定するものではありませんが、彼らがマヌカを薬として用いていたといっても、樹皮を煎じたり、葉を蒸し風呂で使ったり、種を嚙んだりするくらいのものでした。

マヌカの歴史についての知識は、主として宣教師と入植者の記述に頼らざるを得ません。マオリ語は文字を持たないからです。それでもマヌカの薬効成分について最初に気づいたのは、先住民のマオリなのか、それとも英国からの入植者なのかは不明です。



満開のマヌカ

それよりも、マヌカの薬効について最初に気づいたのは鳥類だったという方が正確でしょう。NZ 在来種のおウムがマヌカの花粉を集め、それを羽に振りかける（これは寄生虫を退治するためだと考えられます）様子が観察されていました。このおウムの行動を見て、人間もマヌカの花の効能に初めて気づいたものと思われませんが、その一方でマヌカはちみつはの効能を理解できたのは、意外なことに実は乳牛のおかげだったのです。

1980年代にマヌカについての科学的な研究が進み、その抗菌力が発見されるまでは、マヌカはちみつは人間の食べ物ではなく、牛の餌にされていました。色が濃くて粘度の高いマヌカは、NZでも英国でも需要がなかったからです。両国とも、定番のはちみつといえばクローバーで、輸出用はちみつは「色が明るいほどよい」とされていました。

そもそも養蜂家は、マヌカはちみつを作るつもりはなかったと考えられます。巣箱の設置場所を間違えたり、マヌカの花期が予想以上に早かったり遅かったりした結果、意図せずマヌカはちみつができてしまったのでしょう。それに、粘度のひじょうに高いこのはちみつを巣枠から取り出して絞るのは、他のはちみつに比べると骨が折れます。

マヌカはちみつに関する研究が、NZの酪農の中心地にあるワイカト大学で始まったのは偶然ではありません。しかし乳牛に与える餌で、マヌカの効能が判明したというのはおよそ夢のない話であり、業界（はちみつ製造者やパッキング会社）ではこのいきさつを記録・拡散することに前向きではないようです。そこで、マヌカの効能の発見は、はっきりした証拠があるものではなく、むしろ逸話の寄せ集めのようなものなのです。しかしそれで点と点をつないで全体の像を描くことは難しくはありません。

マヌカ研究の父である微生物学者、ピーター・モラン博士（Peter Molan）は、ワイカト大学で教鞭を執る一方で、地域の酪農会社の一つで、コンサルタントを務めていました。モラン博士は、マヌカはちみつの抗菌力を1981年に初めて自分に知らせてきたのは、近隣の高校で科学主任をしていた、ケリー・シン普森（Kerry Simpson）であったと記しています。

では、ケリー・シン普森にそれを教えたのは誰だったのでしょ？ 教員にとっては、教えるのも仕事、そして学ぶのもまた仕事です。先生は、生徒の質問や生徒の話からも学ぶもの。シン普森先生は当時、英国からNZに移住してきたばかりで、地元についての知識もほとんどありませんでした。

先生は、酪農を営む家庭の生徒から、マヌカはちみつを与えた乳牛はとても元気になったという話を聞き、興味をそそられました（彼はハチについて大きな興味を持っており、後に教職を離れ、NZ農業省一当時の名称。現在は第一次産業省一の養蜂顧問の職に就きました）。シン普森先生はこの生徒の話を、高校の客員講師でもあったモラン博士に伝えたのでした。

モラン博士はマヌカ研究の父として知られていますが、より正確を期せば、マヌカ研究



マヌカ研究の父である微生物学者、  
ピーター・モラン博士 (1943-2015)

の養父というべきでしょう。シンプソン先生と同じく、モラン博士も英国からの移民でした。

NZに移民としてやってきたこの二人の研究者を結びつけたものは、マヌカはちみつが秘めている可能性を初めて発見したことであり、これに大いに興奮した二人はマヌカの研究を決意しました。シンプソン先生がワイカト大学にあるモラン博士の研究所を借り、研究に着手したのは1980年の夏のことでした。

夏休みにワイカト大学ではじまったこのマヌカはちみつの研究の意義が、NZのメディアで報じられるまでには、11年の歳月を待たねばなりません。ところが、このはちみつがニュースになってからでさえ、NZ政府は、この研究の意義にも、マヌカのことを海外のメディアでも報じられ、このはちみつへの関心が高まっていたことにも、気がついていませんでした。

およそ100年の間、英国の植民地であったNZは主として、宗主国に農産物を供給する農場としての役割を果たしてきました。これはつまり、広大な土地を開墾して羊や牛を育てる牧草地を作るため、自生していた森林を伐採してきたと

いうことです。牧草地の次には、りんごやキウイやぶどうの農園を作るため、森林が伐採されてゆきました。そして成長の早い外来種のマツが、材木輸出の主力になると考えられていました。

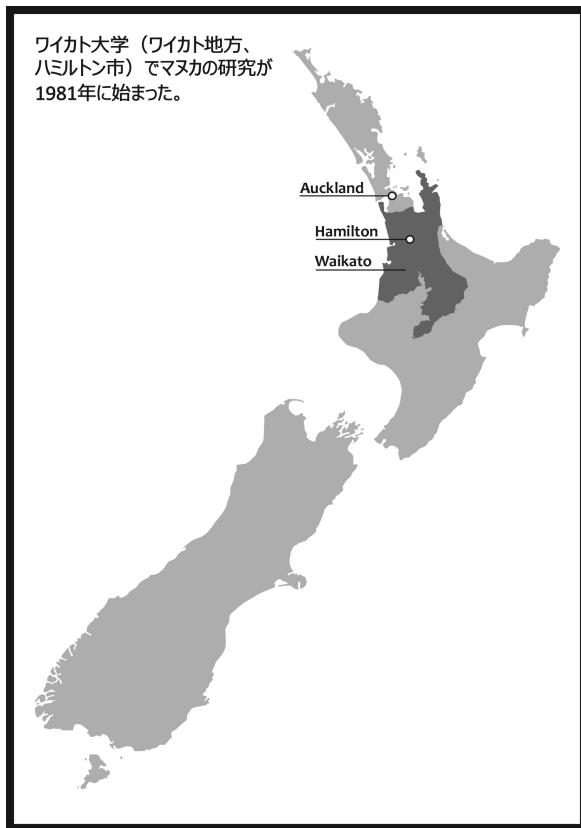
マヌカは、自生種としては最も数多く伐採された木でありましょう。丈夫な上、島の土壌に適していたため、至る所に生えていたからです。農民は、マヌカを伐採することで政府の補助金を得ました。

1992年になってもなおNZ政府は、イーストケイプ地域の75,000ヘクタールに及ぶ土地で、マヌカ及びカヌカの皆伐を計画していました。地元の養蜂業者は、マヌカはちみつの効能について世評が高まっていることを知っていて、この政府の計画に反対しました。

ところがこの抗議に対し、当時の農業大臣は公共のラジオで「マヌカなど雑草にすぎない」と応じたのです（その後政府は一転して、マヌカはちみつとマヌカオイルを生産する、マヌカのプランテーションの設立を支援するようになりました）。

今日では、マヌカはちみつに関する膨大な数の学術論文があり、さまざまな知見が紹介されています。たとえばマヌカがインフルエンザウィルスや、薬剤耐性を持つようになった、毒性・感染力が特に高い細菌に対し、有効であり得るという研究もあります。医療素材の分野でもマヌカの利用は広がっています。

NZ、オーストラリア、それに合衆国、英国、およびヨーロッパのいくつかの国ではマヌカはちみつが、創傷被覆材として承認されています。また衛生用品や化粧品の材料としてもマヌカが広く使用されています。さらに人間の医療だけではなく、競走馬や犬などを対象とする獣医療の現場でも、マヌカの使用が増えているようです。



酪農の中心地であるワイカトが  
マヌカハニー研究の起源

してくれた牛もまた、この恩恵から取り残されてはいません。マヌカはちみつが牛の乳房炎（乳腺組織の炎症）に効果があるという研究結果を受け、マヌカ配合の塗り薬が市販されました。マヌカを使用した乳牛用サプリメントもあります。

マヌカは、何百年、何千年にもわたって利用されてきた植物ではありません。マヌカはちみつには、高い抗菌力がありますが、それが知られるようになって、せいぜい半世紀にも満たないのです。マヌカはちみつの研究はまだ緒に就いたばかりであると語る研究者もいます。マヌカの抗菌成分は、メチルグリオキサール以外には未だに同定されていません。

みつばちが与えてくれるこの奇跡のはちみつには、まだまだ大きな発見がありそうです。

© ブルース・ロスコー

NZ 出身、歴史研究者・著述家・

JCI/ ピュアハニーダイレクト共同設立者

マヌカはちみつの価格も急騰しました。元農業省の顧問でもあったクリフ・ヴァン・イートンは、1988年、誤って1トンのマヌカを作ってしまった。イートンは、出来てしまったはちみつを、家畜の飼料用ではなく、人の食物として小売り用にパッキングして売ろうとしたようです。

ところが、養蜂業界に強力なコネがあったこのイートンでさえ、一人の買い手も見つけることができませんでした。時は流れ、32年後の2020年、NZは6,295トンの「特産マヌカ」を、20カ国に輸出しています。輸出額は3億4,400万NZ\$（日本円でおおよそ268億円）にものぼります。

嬉しいことに、マヌカ研究のきっかけを提供